

序 論

●今日は、「ノアの物語」の第4回目である。

1. 一回目は、6章9節の「ノアは、・・・**その時代にあっても**」というお言葉を中心に、ノアが、神から離れた「不敬虔な時代のまっただ中」を神と共に歩んだ人であることを学んだ。即ち
(1)ノアは、神から離れた罪深い世界を敬遠し、嫌い、また自らを汚すまいと、世から遠く離れて聖なる別世界に留まっていたのではなかった。むしろ世のど真ん中に生きた人だった。
(2)しかし、だからと言ってこの世の人々の生き方、流れに迎合・妥協したのではなかった。
2. 第二回目は、同章 13 節「**それで今わたしは、彼らを地と共に、滅ぼそうとしている**」のお言葉を基に、「ノアの物語」の大きな枠組みとも言うべきテーマである「**神の裁き**」について学んだ。
(1)第一に学んだことは、神様の裁きの正当性であり、妥当性であった。
 - 「勸善懲悪」「天網恢恢疎にして漏らさず」等の諺、考えにも表されているように、聖にして義なる神の裁きの正当性は、人の心に生まれながら深く刻まれている。
 - 愛なる神として罪人を赦すことと、義にして聖なる神として罪人を裁くこととの間のジレンマに立たされたイエス様が出した答えが、十字架であった。
(2)第二に「神の裁き」という事実の前にクリスチャンが取るべき態度について学んだ。
 - やがて私達を正しく裁かれる神の前に立つという厳かな気持ちをもって生きる。
 - 裁きは神様に委ねて、自分で裁くことなく、自らは愛に生きる。
 - 神の裁きを覚えつつ、そこから逃れるべく宣教と伝道に生きる。
3. 第三回目は、9節にある「ノアは神と共に歩んだ」の意味を具体的に考えた。ノアは：
(1)ノアにとって、神と共に歩むとは、まず、神様への全面服従である。即ち、神様のお言葉に従うことであった。
(2)ノアにとって、神と共に歩むとは、次に、家族の前で信仰者としての証しを立て、家族を信仰者として育て、導くことであった。

●第四回目の今日は、「ノア」という人物を、「信仰的側面」と「人間的側面」の角度から学びたい。

本 論

I. 「信仰的側面」: ノアは、神様が自らと結んでくださった「契約」に信頼して生きた人物であった。

A. 創世記9章 11-17 節をもう一度みたい。

1. そのわずか7節の段落の中に、「**契約**」という言葉が**7回**出てくる。即ち、神様は、ノアとその家族、ひいては、全人類と「契約」を結んだということを、ノアに、そして私たちに強調したかったのである。
2. それは、今後、神様は、大洪水によって全人類を滅ぼすことは絶対にしないという神の約束であり、これを積極的に言いかえるなら、それは、神の救いの約束・契約と言える。
3. 神様は、その神と人との「約束と契約」を、単に言葉だけではなく、「虹」という自然界の科学的・物質的・視覚的、しかも、世界的現象をもって象徴的に示されたのである。
4. 即ち、神様のご配慮は、私たちに、いつの時代でも、世界中どこでも「虹」を見るたびに、私達と神様は救いの「契約」で結ばれていることを思い出して欲しいのである。

B. 人間の幸せの基本は「契約」関係の中にある。

1. これまで何回も指摘したように、人は、一人で生きるように造られていない。
(1)人は、二人以上の者が、助け合って、愛し合って生きるように造られているのである。
(2)「人間」という言葉は、もともと仏教用語で、「人の住む社会」「世の中」を表わす言葉だったそうであり、江戸時代頃から、それが人を表わす言葉になったとのこと。
(3)人は、人の間、即ち、社会の中で生きるように造られたのである。それゆえ、人の幸せは、人と人との間にこそ、見出されるべきなのである。

2. そして、そのような人間社会は、ある哲学者たちが言うように「契約」でなりたっている。「条約(Treaty)」と言われるような国家間の政治的契約や、商業上、職業上など様々な社会的な契約もある。
 3. そして、その中でも、最も個人的に身近な「契約」の例は「結婚」の時に行う「誓約」であろう。即ち、結婚は「愛の契約」の上に成り立っているのである。
 4. 聖書は、ダビデとヨナタンとの「友情」も「契約」で結ばれていたと記している。即ち、「ヨナタンは自分と同じほどにダビデを愛したので、ダビデと契約を結んだ」(Iサムエル 18:3)と。[参考：Iサムエル 20:42]
 5. しかし、悲しいことは、人間の世界の「契約」は、「離婚」を始めとして、契約違反、契約反故、契約無視、契約破棄など、不誠実、裏切りの連続である。
- C. その中で、聖書の言う「救い」とは、神によるこの「不信の回復」であり、積極的には、神と人との永遠・不変の「契約」の回復である。
1. 即ち、罪は人間と人間の間にあった信頼を破壊した。十字架の福音はそれを回復し、神様と人とをイエス様の血潮による永遠の契約で結んだ。
 2. だからイエス様は、十字架に掛かる前の晩、「聖餐式」を定めて言われた。マタイ 26章 27-28節「みなこの杯から飲みなさい。これは私の**契約の血**です。」と。
 3. そのことは、更に詳しく、ヘブル9章 20節を中心に同章で説明されている。即ち、神の小羊の血によって、罪のために反故にされていた神との契約が回復されたのであり、それこそが、罪の赦しと救いの目的である。
2. そもそも、旧約聖書から始まって聖書が一貫して強調していることは、「神様と人間の契約」関係である。
- (1)その証拠の一つは、旧約聖書の中で頻繁に使われている言葉の一つ、「ヘセド Chesed (חֶסֶד, also Romanized khesed, hesed)」である。
 - この言葉は、旧約聖書の中で 248 回用いられていると言う。
 - しばしば、英語では “loving-kindness,” “kindness” or “love.”と訳され、日本語では、「恵み」とか「慈しみ」、更には「愛」と訳されている。
 - しかし、聖書学者たちは、この言葉の背後に「契約」の概念があると強調する。言い換えるなら、単に「恵み」「慈しみ」「愛」という以上に、この言葉には、「契約の恵み」、「契約の慈しみ」、「契約の愛」という意味がある。
 - 即ち、そこには、「契約」関係が意味する、「誠実さ」「真実さ」「堅固さ」、「確固とした力強さ」「着実さ」「強さ」等が、含まれているのである。
 - 即ち、一時的、且つ、時には不安定でさえある情的、感傷的なやさしさや慈しみ、愛ではなく、それは、永遠、不変の契約の愛を意味していた。
 - (2)この「ヘセド」の表す「愛の契約関係」こそが、さながら「誓約」によって結ばれた夫婦のように、神様と私たちとの関係であるべきなのである。
 - 神様がノアに「虹」を見せたのは、まずその神様との愛の契約が回復されたこと、即ち、「救い」の宣言であった。
 - 更には、「虹」を見るたびに、ノアが、その神様との契約を思い出し、あらゆる状況の中で、契約故の神様の守りと導きと祝福を確信するためであった。
3. この不信の時代に、私たちが、必要としている救いは、正にこのヘセドの表す「契約」関係を神様との間に回復することである。
- (1)私たちも、ノアのように、自然界の中での「虹」を見るたびに、神との愛の契約の中に入れられたこと、罪赦されて神の子供とされたことを思い出し、確信したい。
 - (2)そして、その愛の契約のゆえに、私は神様に導かれ、守られているのだということを、あらゆる状況の中で確信するものでありたい。
 - (3)更に、それは、私たち新約の時代のクリスチャンにとって、自然界の「虹」の出現を

待たなくても、あの最後の晩餐の席で、ぶどう酒の杯を取って、「みなこの杯から飲みなさい。これは私の**契約の血**です。」と弟子たちに言われ、イエス様が制定された聖餐の式を守るたびに、イエス様との愛の契約の中に入れられたこと、その契約ゆえに約束されている御守りと、導きを確認したい。

D. これが、ノアの霊的、信仰的な側面である。

1. 即ち、彼の人生は、信仰的には、いつも「虹」を見つめ、覚えて生きる人生であった。
2. 即ち、いかなる状況の中でも、それに左右されることなく、その状況を超えた向こう側にある虹を見つめる人生だった。その虹こそが、神様との契約であった。
3. 虹が象徴する、イエス様の十字架の血潮のゆえに結ばれた「神様との愛の契約」により頼み、すがり、期待する人生であった。

II. 次に、ノアの「人間的側面」を学びたい。即ち、彼は、「弱さ」「失敗」「恥」と共に生きた人であった。

A. それは、創世記 9 章 20-27 節の中に見ることができる。

1. 即ち、それは、「ぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になって」酔い潰れて、寝込んでしまっていたノアの姿である。
2. それは何を意味しているのか？
 - (1) ノアは、一方で、全き人、正しい人、神と共に歩んだ人と言われている(6 章 9 節)。
 - (2) しかし、同時に、彼は、人間として、恥ずかしくなるような、失態を演じるような、弱さを一杯もっていたことを意味していた。
 - (3) 即ち、ノアの人間的側面とは、ノアも「弱さ」をもつ普通の人間であることである。

B. このことを整理すると次のことが言える。

1. 第一、信仰的にどんなに成長し、成熟していても、人間はなお弱さを抱えて生きているという事実である。
 - (1) ノアは、6 章 9 節で明らかに「完全な人」「全き人」「成熟した人」として描かれている。即ち、聖書は言う：
 - 「ノアは正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神と共に歩んだ。」と。(参考：7 章 1 節)
 - ノアは、まるで途轍もなく近づきたい聖徒、神の人と言うイメージである。
 - (2) しかし、その同じノアが、ここで (21 節)、お酒を飲んで、酔い潰れて、なりふりも忘れて、ま裸になって寝込んでしまったという。何という体たらくな変化か！
 - (3) あり得ないと言いたい、隠しておきたい現実である。しかし、聖書はそれを赤裸々に記すのである。
 - (4) なぜなら、聖書は、それを悪いこと、あってはならないこと、隠さねばならないこと、恥ずべき事として裁いていないからである。
 - (5) クリスマンは、みな、即ち聖徒でさえ、このような弱さをもっているのである。
 - (6) パウロも、それが何であるかは分からないが、できたら神様にとって欲しいと願うような「弱さ」を持っていた(Ⅱコリント 12)。
 - (7) 私たちクリスマンは、みなこのように弱さと同居しながら生きているのである。
2. 第二に、考えたいことは、その「弱さ」をどのように受け留めるべきかである。
 - (1) 「弱さ」を、それ自体「罪」と思い、罪責感をもって自分を責めてはいけない。
 - このノアの記事においては、彼がぶどう酒を飲んだこと、飲み過ぎて、酔ってしまったこと、裸で寝てしまったことを、この聖書の箇所においては、罪として責めているようには思えない。9 章 20-27 節。
 - ここでは、むしろ、後に触れるが、そのノアの姿をどのように扱ったかで、息子の一人ハムが責められているのである。
 - それが証拠に、パウロは、彼が訴えた「弱さ」を取って頂くことはできなかった。しかし、弱さがもし罪なら、神様はそれを取り除かれたであろう。

- (2)でも、「弱さ」を、「それで良い」、「当然のことだ」と言って、放っておいてはいけない。むしろ、それをカバーしてくださいとそのため祈らなければならない。
- なぜなら弱さはそれ自体罪ではないが、罪へと導く誘因になるからである。
 - だから、パウロも、そのために謙って祈った。「主よ、私は弱いのです。助けが必要です。あなたの力をもって覆ってください」と。
 - そのとき、弱さが強さに変わるのである。
- (3)最後のことは、お互いの「弱さ」を知ったら、それをカバーし合うことである。
- ノアの「弱さ」と言うべき、父の裸の姿を、最初に発見し、見たのは、ハムと言う息子であった。彼は、そのことを、セムとヤペテという二人の兄弟に告げた(9章22節)。
 - しかし、それを聞いた二人の兄弟は、父の裸を覆うべき上着を取ると、父の裸を見たくなかったので、後ろ向きになって父に近づき、そっと父に上着をかけて、その裸を覆った。
 - 聖書は、ノアの口を通して、ハムのしたことを責め、セムとヤペテのしたことを称賛した。彼らの間にはどのような違いがあったのか？
 - ハムは、人の弱さをまじまじと見つめ、それを指摘し、いわゆる告げ口をした。神様は、それを嫌われるのである。
 - 神様は、人の粗(あら)や弱さを探したり、突いたり、噂にしたり、酷評したりすることは嫌われるのである。
 - 逆に、ノアの恥を見たくない後ろ向きに近づき、衣を掛けた、セムとヤペテのように、人の弱さや失敗、足りなさを、口にしたり、噂にしたりすることさえしないで、カバーしようとする(弁護する)人を神様は喜ばれる。

結 論

1. 今日、ノアの信仰的側面から学んだことは、私たちは、神様との永遠の愛の「契約」の中に入れられた者であることであった。
 - 即ち、私たちは、イエス様の十字架の血によって、罪を赦され、神様と、親と子としての、また妻と夫としての永遠の「愛の契約」(Covenant Love)の中に入れられたのである。
 - 私たちは、そのことを、虹を見るたびに、聖餐式にあずかるたびに、思い起こしたい。
 - そこにこそ、クリスチャン生涯の基礎があり、あらゆる人生の状況の中で、それを乗り越える力と希望がある。
2. 一方、ノアの人間的側面から学んだことは、私たちは、如何に靈的に成熟していたとしても、人間的には「弱さ」が一杯あることであった。即ち、靈的成熟と人間的弱さは同居するのである。
3. そこで、私たちは、更に、この人間の弱さの現実をどのように受け止めるべきかを学んだ。
 - 弱さは責めるべきではない。しかし、弱さのために祈れ。
 - 弱さを謙虚に認め、神様に助けを仰ぐ。そうすれば、弱い時にこそ強くなれることを経験する。神の力は、私たちが弱いときにこそ強くする。Ⅱコリント 12章7-10節
 - そして、最後に、お互いの弱さをカバーすることであった。即ち、お互いがお互いの弱さを暴いたり、噂にしたり、吹聴したり、話のタネにしないで、勿論、責めたり、裁いたりもせず、それを愛をもって覆うこと、カバーし合うことであった。
4. ジュディス・ギャリー婦人は、日本で50年以上にわたって宣教師として奉仕され、宣教団からも表彰されたが、家内の郷里、長野県の本巣福島の地でも開拓伝道して、家内の母親を信仰に導き、育ててくださった。バッファロー-NY出身の方であるが、引退直後、当地を訪ねてくださった。そのとき、その彼女が、家内の母のことを思い出して、ふとこのように言われた。「かおるさんのお母さんには、教会で一緒だった時代に、しばしば助けられた。それは、誰かが誰かの悪いことを言うような会話になると、スーッと上手に話題を変えるのが上手だった」と。
5. 私たちも愛の教会として、互いの弱さを暴くのではなく、覆い合う愛の群れとなりたい。